コラボレーション・ライティングを通じた「対話的な学び」の質的研究

―バフチン的ポリフォニーの視点から―

漆畑　祐佳・那須　雅子

１　はじめに

本稿では、高校英語において新学習指導要領で掲げられている「主体的・対話的で深い学び」のうち、特に「対話的な学び」を実現するために、クラス英詩のコラボレーション・ライティング活動を実践した。高校英語において、特に仮定法の学習は、文法の暗記中心な学習に陥りやすいとされている。そこで、「対話的な学び」をどのように実現できるのかを探るために、従来の画一的な「暗記中心」の文法学習からの脱却を目指し、クラス英詩のコラボレーション・ライティング活動を導入した。ケネス・コーク（Kenneth Koch）の“Class Collaborative”というクラスで協働して作り上げる英詩創作の活動を、日本の外国語教育としてのクラス英詩創作に応用した。その活動を、教師側の指導実践の見地から「コラボレーション・ライティング」として再定義する。さらに、クラス英詩を創作する活動と読む活動を経験した生徒たちの、自由記述によるアンケート調査結果を、KH コーダーによって分析した。その上で、バフチン(Mikhail Bakhtin)の対話理論を援用したバフチン的ポリフォニーの視点から「対話的な学び」がどう実現されているのかを、生徒間の関わりと照らし合わせてその効果を検証し考察を深める。

２　コークの詩の創作理論について

コークは、*Wishes, Lies, and Dreams*（Koch, 1970）の中で、創作を行う際に自由に言葉を生み出すための具体的な指南として、Poetry Ideas を示している。生徒の施行を深めて創作しやすいように用いるのが、Poetry Ideas である。具体的には、韻を伴わない自由詩（Free verse）を勧め、さらに、自分の過去に関して詩（Something in the past）を書いたり、音楽を通して刺激を受け（Writing to music)、その詩の感化から詩の着想を得た詩(Poems appealing to you）を書いたり、クラスメイト同士で１篇の詩を協働して創作すること（Collaborating on a poem with a friend）を提案している。この“Collaborative poems”については、日本の連詩など他の国々の協働で創作する詩の取組についても言及している（64)。本研究では、この“Collaborative poems”または、“Collaborating on a poem with a friend”におけるクリエイティブ・ライティングの実践を、日本の高校英語の仮定法の授業で導入した。そして、クラス英詩作成の過程において、編集作業を含め、必要とされる教師の足場掛けの視点から、「コラボレーション・ライティング」と定義する。

３　「対話的な学び」とバフチンの対話理論

「主体的・対話的で深い学び」についての定義やそれに向けての授業方法は、新学習指導要領において詳細に説明されてはおらず、具体的な方策は授業者の実践に委ねられている。そこで、中央教育審議会の答申（中教審第197 号）に該当する箇所を参照すると、「『主体的・対話的で深い学び』の実現とは、特定の指導方法のことでも、学校教育における教員の意図性を否定することでもない。人間の生涯にわたって続く『学び』という営みの本質を捉えながら、教員が教えることにしっかりと関わり、子供たちに求められる資質・能力を育むために必要な学びの在り方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくことである」（中央教育審議会、2016、p. 49）としている。さらに、「対話的な学び」の過程において、他者を尊重した「対話的な学び」の中で、社会や世界との関わりを通じて情報や考えなどを伝え合う言語活動の改善・充実を図ることが重要である。このため、言語の果たす役割として他者とのコミュニケーション（対話や議論等）の基盤を形成する観点を資質・能力全体を貫く軸として重視しつつ、コミュニケーションを行う目的・場面・状況に応じて、他者を尊重しながら対話が図られるような言語活動を行う学習場面を計画的に設けることなどが考えられる。（中央教育審議会、2016、p. 200）

「対話的な学び」とバフチンの対話理論においては、大きな関連性が認められる。バフチン（1981/1992）の対話理論の中心は、「対話」とその様々な過程である。バフチンの対話が実現するのは、複数の声がそれぞれに特定の権力を持つことなく「相対化」され、同じ物事に対して意味を競いあい、他者とぶつかりあっている時であると考えられる。バフチンの対話（dialogism）とは、１つのテクストの中に２つ以上の声が存在すること(heteroglossia）によって支配された世界の認識論的様式でもある。その世界では、すべてがより大きな全体の一部として理解され、意味と意味の間には絶え間ない「相互作用」があるとされる。また「相互作用」を通じて、すべてが他の意味を条件づける可能性がある。さらに、バフチンによると、この「相互作用」の中には対話によって生じる現象としての「多様性」があり、そこから自己を再認識することになる。このように複数の声が「相

対化」され、「対話」の中での他者とぶつかり合いながら「相互作用」が生じ、「多様性」から「自己の認識」がもたらされることによって「深い学び」に通じる「対話的な学び」が可能となるのではないかと考える。

４　日本の高校での英詩「コラボレーション・ライティング」実践研究の概要

「コラボレーション・ライティング」としてのクラス英詩の創作活動は、授業２回にわたり帯活動として導入した。“I wish”で始まる英文に慣れてもらうために、洋楽の歌詞を導入した。生徒に１回目の授業では、定期テスト返却後の約 30 分を活用した。前半、生徒は Joel Corry の“I Wish (feat. Mabel)” の歌詞を見ながら曲を聴き、その後、教師が歌詞の意味内容について説明を加えた。その際、教師は仮定法過去、及び仮定法過去完了の文法を説明し、“I wish”で始まる英文を用いてクラス英詩 Wish Poem を作成することに言及した。後半、生徒は自己の願望や欲求を“I wish”で始まる英文で表現し、「1 行詩」を時間内に提出した。教師は、コラボレーション・ライティングの一環として、クラスごとの英文をマズローの欲求５段階説を応用して分類し、連ごとのまとまりを形成するクラス英詩として編集した。洋楽の導入、仮定法の文法知識の理解、そして、“I wish”で始まる英文を創作し提出するといった授業展開を設定することが、教師の足場掛けであり、これこそ、「コラボレーション・ライティング」の指導の基盤である。２回目の授業では、前回に続く帯活動として、生徒に前回の授業を思い出してもらうために、同じ曲を再び導入し、その後、教師が編集した４クラス分のクラス英詩を配布した。参考資料として、コークの実践したアメリカ人小学生の英詩を配布し、自分たちの英詩と比較する活動を行った。アメリカ人の小学生の英詩作品を用いた理由は、語彙も平易で日本人高校生にとって理解しやすいからだ。さらに、マズローの欲求５段階説を解説し、連のまとまりについての説明を受けた。その後、生徒たちは自分の英文を探す指示を受け、自分のクラスの英詩や他のクラス英詩も自由に読む時間を与えられた。ペアやグループで感想を共有し合ってから、「クラス英詩の感想を自由に記述してください」という自由記述のアンケートと「クラス英詩の課題についてどう思いますか」という選択式アンケートに回答し、４クラスのうち合計 146 人からの回答を集約した。

５　指導実践の見地からの「コラボレーション・ライティング」

日本の高校でクラス英詩を実践するにあたり、コークの実践方法と異なり、連毎のまとまりを生み出すことが難しいと想定された。コークが小学生向けに実践した方法では、“I wish”に付け加えて、都市や色や架空の人物などを組み合わせるよう、２つ以上の条件を与えていた。一方で、日本の高校における「コラボレーション・ライティング」では、仮定法過去及び過程方過去完了といった文法知識を応用しながら、教師は独自の足場掛けを行い、“I wish”を用いた一文を生み出してもらう。そのため、“I wish”で始まること以外には、特に明確な条件を与えていない。

日本におけるクラス英詩の編集方法は、教師の足場掛けの視点において、「コラボレーション・ライティング」の中核を成すと考えられる。提出された英文を、連のまとまりとして見出すために、I wish から表現される生徒の想いや願いといった個人的な声をクラス全体の集合体へとするまとまりのある連の展開に留意した。具体的な方法としては、マズローの欲求５段階を応用した。マズロー は *A Theory of Human Motivation* (Maslow,1943) の中で、人間は常に欲求を抱き続ける存在であり、５つの段階をピラミッドとするならば、一番下となる第５段階の生理的欲求から徐々に安全の欲求、社会的欲求、承認欲求、を満たしながら、自己実現への欲求と向かっていく存在だとしている。この５段階の欲求の形を逆の順序で応用し、生理的欲求から、自己実現への欲求、さらには、自己超越に至る英文を、クラス英詩のクライマックスとして最終連に来るように分類した。

６　「対話的な学び」の視点に基づくクラス英詩の分析および考察

提出された英文を４連から５連の関連性のあるまとまった連へと教師が分類するが、実際には、クラス英詩の連ごとの分類は一義的に固定されたものではない。例えば、生徒の学校生活では一番切実だと考えられる資格試験の勉強を第一連に含めるなど、編集は変則的に行った。同じ内容の英文は１文に纏めるなどの編集も適宜行った。連ごとに小さなテーマ性を保ち、詩全体としては生徒たちの日常生活から自己実現へと向けられた様々な欲求が浮かび上がるようにクラス英詩４篇が作成された。あるクラス英詩の最終連の一例を以下に記す。

> I wish I could be a distinguished person. / I wish I were a pro baseball player. / I wish I could study hard. / I wish I could drive a car. / I wish I danced very well. / If I was our principal, / I would say the wise saying. / I wish I were a person with supernatural power / because I pray for world peace.

7　「コラボレーション・ライティング」の考察とまとめ

２回目の授業の最後にアンケート調査を行い、「クラス英詩の感想を自由に記述してください」という質問に対し、生徒たちに自由記述で回答してもらった。選択式の質問では、「クラス英詩の課題についてどう思いますか」といった全体的な感想を尋ねた。４クラスで、146 人から回答があった。生徒の記述したテキストを、KH Coder を用いてコンセプトを計量的に分析した。図１は、自由記述に含まれる内容を描き出した共起ネットワークの図である。出現回数が多い語ほど円が大きく、線で結ばれている語は関連性が強い。

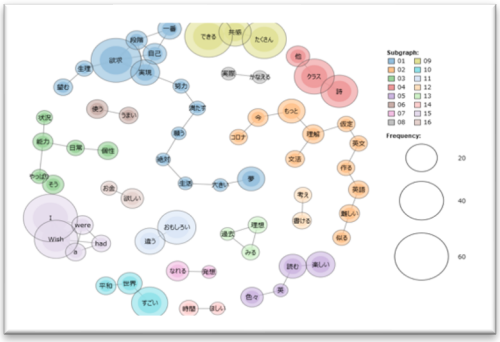

図１：自由記述の共起ネットワーク

表１：アンケート結果に見られた諸要素の人数

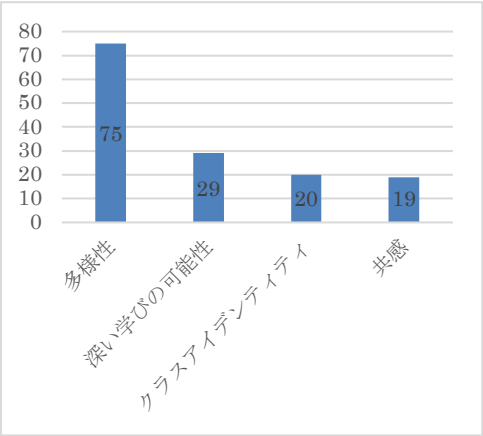

表１では、146 人中、75 人（51%）が他者の考えや価値観の「多様性」を認める記述をした。クラス英詩を読みながら、自分自身の声とともにクラスに宛てて発せられた他者の声の多様性を理解し、約半数の生徒がその気づきについて記述していた。さらに、自分のクラス英詩を他のクラスと比較し「クラスアイデンティティ」を感じている記述が 20 人（14%）に見られた。高校生はクラス単位で生活しており、自身が属するクラスを超えてより広い視野を持って、他クラスを相対化し、クラスのアイデンティティを「自己認識」できたと考えられる。クラスという集団をまとまりとして認識し、そこにクラスの一体感やクラスごとの個性を自分なりに認識できたことは、「対話的な学び」を生み出していると考えられる。これは、バフチンのポリフォニーあるいは、１つのテクストの中に２つ以上の声が存在すること（heteroglossia）によって支配された世界の認識論的様式が反映されていると解釈されよう。本稿では、クラス英詩のコラボレーション・ライティングを定義しながら、「対話的な学び」について、その成果をクラス英詩の作成、分析及びアンケート調査に基づいて報告した。

参考文献

文部科学省（2016）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」、『中教審第 197 号』. Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf(最終閲覧日 2025 年 5 月 30 日）

文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領（平成 30 年 3 月告示）解説総則編』Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20211102-mxt_kyoiku02-100002620_1.pdf（最終閲覧日 2025 年 5 月 30 日）

文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領（平成 30 年 3 月告示）外国語編』 Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf（最終閲覧日 2025 年 5 月 30 日）

Bakhtin, M.M. (1981/1992). *The Dialogic Imagination: Four Essays*, edited by Michael Holquist: Translated by Caryl Emerson and Michael Holquist. Texas: University of Texas Press.

Corry, Joel., et al. (2021). I Wish (feat. Mabel). UK: Warner Music.

Koch, Kenneth. (1970). *Wishes, Lies and Dreams Teaching Children to Write Poetry*. New York: Harper Perennial.

Maslow, A.H. (1943). A Theory of Human Motivation. *Psychological Review*, 50, pp.370-396.